

國學院大學學術情報リポジトリ

「Aは Bより……」文の〈成立条件〉：
あわせて、「は」「もっと」「Vたほうがいい」について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国学院大学日本語教育研究会 公開日: 2024-11-20 キーワード (Ja): 「AはBより……」文, 「は」, 「もっと」, 「ずっと」, 「Vたほうがいい」 キーワード (En): 作成者: 菊地, 康人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001119

「AはBより……」文の〈成立条件〉

— あわせて、「は」「もっと」「Vたほうがいい」について —

菊地 康人

【キーワード】 「AはBより……」文, 「は」, 「もっと」, 「ずっと」, 「Vたほうがいい」

0. はじめに

本稿⁽¹⁾は, 「AはBより……」文について, あまり留意されていないと思われる〈成立条件〉に目を向けることが主な論点であるが, 他に, 比較に関わることとして「もっと」と「Vたほうがいい」にも触れる。いずれも, 初級日本語教育で扱われる学習事項だが, 日本語学としての分析や日本語教授者からの留意に残念ながら不十分な点があり, 日本語学習者が必ずしも適切に使えていない面のある学習事項である。本稿は, 日本語学的な関心と, 日本語学習者がこれらを適切に使えるようにサポートしようとする動機からの執筆であるが, また, いずれも, 文型や語句を〈どのような場合に(どのような状況で)使うか〉をしっかりと考える/教える/身につけることの重要性への留意を, 教授者と学習者に喚起する例でもある。論考の過程で「は」にも触れ, 〈「は」が付く語はどのような語か〉についての考察も行う。

第1節では「**場所**にNがある」(存在文)と「Nは**場所**にある」(所在文)を比べ, 初級日本語における「は」と「が」の第一歩に触れる。これは, 第2節で「が」の比較文「A(のほう)がBより……」と, 「は」の比較文「AはBより……」を比べるための準備である。第2節では, 比較を表すこの両文型の違いと, それが第1節で見た存在文vs.所在文の違いと平行的ではないことを見, 「AはBより……」の「扱いにくさ」を指摘する。この「AはBより……」文が実際にどう使われるのか, その成立の条件を考える第3~6節が中心部分である。第3・4節ではそれぞれ「AはBより……」文のAとBについて考察する。第3節は「は」についての考察でもある。第5節ではこの両節で見たことを改めて見比べ, 第6節では, 「AはBより……」文が自然に使われる, 実際の授業で使える例文・状況を考える。第6節までが「AはBより……」文についてである。第7節は「もっと」(および「ずっと」), 第8節は「Vたほうがいい」を扱う。

1. 「**場所**にNがある」(存在文) vs. 「Nは**場所**にある」(所在文)

本題に入る準備として, 初級日本語での「**場所**にNがあります」(存在文)と「Nは**場所**にあります」(所在文)という2つの文型の違いについて簡単に確認しておこう。具体例としては,

(1) 机の上に辞書があります。 vs. (2) 辞書は机の上にあります。

のような文である。前者は、その場所（机の上）に何があるかを問題にする述べ方、後者は、そのN（辞書）がどこにあるかを問題にする述べ方である、として説明し、具体的には、

- | | |
|----------------------|----------------------|
| (1) Q. 机の上に 何がありますか。 | (2) Q. 辞書は どこにありますか。 |
| A. 机の上に 辞書があります。 | A. 辞書は 机の上に あります。 |

のように〈対応する疑問文の違い〉として教えるのが一般的だと思われる⁽²⁾。(1)「机の上に辞書があります。」と (2)「辞書は机の上にあります。」は、当該の文だけを取り出すと同じ内容を述べているように見えるが、実はこのように、両文は、はたらき — 〈どんな場合に使うか〉 — が違うわけである。質問の文とセットにしての (1') vs. (2') の学習は、この両文型の違いの学習というだけでなく、初級での「は」vs.「が」の学習の第一歩でもあるといえる⁽³⁾。

2. 「A (のほう) がBより……」vs.「AはBより……」；後者についての問題提起

存在文 vs. 所在文の次に再び「は」vs.「が」が登場する学習事項が、比較である。

(3) 北海道 (のほう) が 九州より大きいです。 vs. (4) 北海道は 九州より大きいです。
このような、「が」の比較文と「は」の比較文（と仮に呼ぼう）の両方が、初級の前半か中盤に登場する。この両文も、文の内容は同じだが、「が」の文と「は」の文という違いがあり、はたらきも違う。ここまでは、上の存在文 vs. 所在文の関係と似ていて、それと同じような関係ではあるのだが、一つ、存在文 vs. 所在文の場合とは違う点がある。それは、(3) vs. (4) を〈対応する疑問文（疑問詞のある）の違い〉としては説明できないことである。

(3) の「が」の比較文のほうは、「どちらが……？」という疑問文と対応する。

- (3) Q. 北海道と九州と どちらが大きいですか。
A. 北海道 (のほう)⁽⁴⁾が (九州より) 大きいです。

そのため、こちらは、教授者にも教えやすく、学習者にも理解しやすい。

一方、「は」の比較文のほうは、対応する疑問文としてどんな文が想定できるだろうか。

- (4) Q. 北海道は どこより大きいですか。
A. 北海道は 九州より大きいです。

という問と答をとりあえず考えてみると、このQ「北海道はどこより大きいですか？」は、質問としておかしい。比較というのは、比較する基準が明らかになってそれと比べるのが普通であり、比較の基準がわかっていなくてそれを質問することは普通ないからである。(4)のQは質問として成り立たず、(4)には〈対応する疑問文（疑問詞のある）〉を求めにくい⁽⁵⁾。この点で、所在文が「Nはどこにありますか」との対応で説明できるのとは違いがある。

このように、「は」の比較文は、対応する疑問文があって使う文ではない。では、(4)のような「は」の比較文は、どのような場合に使うのか。これを示さないと、本当は、学習者は「は」の比較文を適切に使えるようにならない。実際の初級教科書ではそれが示されず、ただ(4)のような文の意味を学習するだけになっている場合が多いのが実情のようだが（それは、「は」の比較文がどのような場合に使われるのかということが、教授者にもなかなか答えにくい間だということでもあろうが）、以下、この〈「は」の比較文「AはBより……」はどのような場合に使われるのか〉— この文の〈成立条件〉といってもよからう — を考えてみたい。

例えば、日常会話で唐突に「北海道は九州より大きいです。」と発したとしたら、不自然である。一方、もし、北海道と九州のどちらが大きいかを問題にする状況ができていた

としたら、「北海道は……」ではなく、「北海道 (のほう) が……」と言うのが普通であろう。という具合で、「は」の比較文「A は B より……」が自然に使われる場合/状況というのは、少し考えただけでは思いつきにくい。

だが、それを考え、それを踏まえて、この文型の教え方を考える必要がある。以下、この問題に入っていく。第3節では、「A は B より……」の A にはどのようなことばが入るかを考え、第4節では、この文の B にはどのようなことばが入るかを考える。

3. (比較の文に限らず、一般に)「Aは……」のAに入るのはどのようなことばか

比較の文に限らず、一般に「は」の文「A は……」の A に入るのはどのようなことばか、という問を立ててみよう。

A は、いわゆる〈主題 (Topic)〉で、〈それについて (それを話題として) 話すもの〉である。したがって、〈それについて話しておかしくないもの〉であれば、「A は……」の A のところに入る (= 「は」が付く、〈主題〉になる) ことができる。具体的な例としては、次のようなものがあげられる。

「A は……」の A のところに入ることのできるものの例：

[ア] 話し手、話し手の家族や、その持ち物

[イ] 相手 (聞き手)、相手の家族や、その持ち物

[ウ] 話し手や相手の近く (手元や見えるところ) の物・場所、近くにいる人

例 「それ (相手の近くにあるもの) は何ですか」「ここは列の最後尾ですか」

「あそこにいる人は関係者ですか」

[エ] 「今日 (昨日・明日)」「今 (先・来) 週」「今 (先・来) 月」「今 (去・来) 年」「今 (前・次) 回」など

[オ] 直前に (または少し前に) 話題にしていた人や物

[カ] それまで話題にしていなかった人や物の場合は、一般的には、まず話題として導入してから (話題になってから) 「は」が付く

例 A：きょう、電車の中で、偶然鈴木君に会ったよ。

B：ふーん。懐かしい名前だねえ。

A：鈴木君は昔からまじめだったけど、今の仕事も堅くて、警察官をしてるんだって。

B：警察官は、彼に合いそうだね。

[キ] それまで話題にしていたわけではないにもかかわらず、「話題として導入する」プロセスを経ずに、話題にすることができる人や物

[キ-1] 話し手や相手にとって身近で、両者間ですぐ了解・特定できて、その話を急に話題にしてもおかしくない人や物 例：下記 (5)–(7)

[キ-2] それについて話題にしておかしくない状況が整っている人や物 例：下記 (8)–(11)

以上のうち [ア]–[カ] は、「は」を付けて話題にすることができるのは当然であるが、[キ] のように、それまで話題にしていたわけではないにもかかわらず、「話題として導入

する」プロセスを経ずに話題にすることができる人や物もある。どのような人や物でならそれができるのかについて、とりあえず [キ-1] と [キ-2] のように記述してみた。

[キ-1] は、例えば次の (5)－(7) のような場合である。

(5) 山田君はきょう来るかな？

これは、例えば休暇をとっていた同僚「山田君」がきょう職務に復帰するのかどうかを、別の同僚に対して話題にする場合である。それまで「山田君」が話題になっていなくても、出勤直後に (5) のように話し出すこともできる。この例の場合、話し手と相手の間で、「山田君」が日常的に話題になっているので、いきなりの「は」が問題なく使えるのだが、日常的に話題になっているというほどではなくても、すぐ了解・特定できて、その話を急に話題にしてもおかしくない人や物なら、同じように「いきなりの「は」」が使える。例えば、パーティー会場に向かう途中で、同じ会場に向かう旧友に会って、もう一人の旧友「山田君」がそのパーティーに来るかどうかを話題にする場合も、(5) のように言えるだろう。

(6) 会社はいつ休めるの？ このところ土日も休めていなくて、大変だね。

それまで「会社」の話をしていなくても、こう発する場合があろう。この話し手と相手との間で（家族などの間で）、「会社」は、それまで「会社」の話をしていなくても、いきなり「会社は」と始めておかしくないことばなわけである（「学校」「大学」などでも、あることである）。

(7) 卒論はもう出した？

(7) は、卒論提出時期の学生に対して、友人・教授・家族などが発する文である。卒業を控えた学生に対して、「卒論」は、それまで「卒論」の話をしていなくても、唐突に話題として持ち出しておかしくないことばである。

[キ-2] は、例えば次の (8)－(11) のような場合である。

(8) 政府は、……方針を固めました。

ニュースを伝える番組の冒頭でキャスターが発する文である。それまで「政府」を話題にしてきたわけではないが、ニュースでキャスターが政府の話をするのはよくあること、という了解が視聴者との間で成立しているので、「政府は……」で始められるわけである。一般の人どうしの日常会話なら、唐突に（例えば、出勤して職場の同僚にいきなり）「政府は……方針を固めたね」と言うとなれば奇異である。ニュース番組なので、キャスターがいきなり政府を話題にしておかしくない状況が整っているのだと見るべきである。

(9) 日本語は、英語や中国語とはだいぶ違うことばだという印象があるでしょうが、……

(9) も日常会話で唐突にこう話し始めたならやはりおかしいが、日本語について話しておかしくない状況が整っている場合、例えば「日本語学」の授業で教授者の発する文とか、日本語についての講演で講演者の発する文としてなら、冒頭から「日本語は……」と話せるであろう。

(10) コロナ⁶⁾は、簡単にはおさまらないみたいですね。

(10) なら、一般人どうしの日常会話で唐突に（知り合いに会うなり）発することができよう。「コロナ」は、現今、誰にとっても強い関心の対象なので、それができるわけである。

(11) いやあ、大谷選手⁷⁾はすごいですね。いつものことながら……。

(11) も、例えば「大谷選手」が活躍した翌日の野球ファンどうしの会話でいきなりこう発することができそうである。よく知られた人やものは、前の文脈で話題になっていなくても、それを導入する手続きを踏まずに、「は」を付けて話題にすることが許されやすい。

ただし、よく知られた人やものでも、「〇〇は……」と持ち出すには、一般的にはやはり「それを持ち出しておかしくない状況」がある程度整っている必要があろう。「徳川家康は……」と話し始めて不自然にならないとすれば、例えば歴史談義をする状況ができているとか、しばしば歴史上の人物を持ち出して訓示を垂れるのが好きな人だということが周りにも了解されている人が話す場合とか、そういう場面である。大谷選手といえども、いきなりの「大谷選手は……」は、例えば、顔を合わせれば野球の話をするような野球ファンどうしの会話でこそ、許されやすいことなのではと思われる。

こう比較してみると、現今の「コロナ」は、他の「よく知られているものや人」である「政府」や「日本語」や「徳川家康」や「大谷選手」より“強い”ことになる。

以上、「Aは……」のAに入るのはどのようなことばか、という問題を考えてみた。[ア]ー[キ]のまとめとして、「Aは……」のAは(=「は」が付くのは)、一言でいえば、〈それを話題にしておかしくない(おかしくない状況が整っている)もの〉といえると思われる⁽⁸⁾。ここまでの話は、比較の文に限った話ではなく、およそ「……は」で始まる文全般にあてはまることであるが、本稿の本題である比較の文「AはBより……」のAについても、もちろんあてはまる。

4. 「AはBより……」のBに入るのはどのようなことばか

さて、そもそもの問題は、〈「は」の比較文「AはBより……」は、どのような場合に(どのような状況で)使われるのか〉ということであった。その1つの要因として、まずAに入るのはどのようなことばかを考えてきた。次に、もう1つの要因として、「AはBより……」のBのほうにはどのようなことばが入るのかを考えよう。

Bには〈比較の基準〉が入る。そこで、具体的にどのようなものなら〈比較の基準〉になれるのかを考えてみよう。その答がBの満たすべき条件ということになる。

言い換えれば、「AはBより……」のBに入れることに違和感があることばがある、ということでもある。まずこのことを、以下の例で確認しよう。

(12) 国学院大学は、英学院大学より 野球が強い。

「国学院大学」が「は」を伴って、話題として文頭に(「Aは……」のAのところに)登場することについては、そうしておかしくないだけの状況が整っているとしよう。ここまではよいとして、Bの「英学院大学」と聞いたとき、聞いた人は「それ何?」という反応が一般的であろう。実際、この大学名は本稿の創作による架空のものである。だが、仮に実在のものであっても、「それ何?」と思われるようなもの(この例でいえば、聞いたことのないような大学など)が唐突に〈比較の基準〉としてあらわれるのは不適當である。

(13) 国学院大学は、青山学院大学より 野球が強い。

(13)では、Bの「青山学院大学」は、よく知られた大学なので、「それ何?」とは思われないが、「どうしてそれと比べるの?」—つまり〈比較の基準〉としての必然性が見えない—と思われてしまいそうである。だとすると、やはり〈比較の基準〉としては不適當で、(13)は違和感のある文ということになる。(13)が自然な文として発せられる場合を考えるなら、例えば「東京渋谷区に(メインキャンパスが)あつて野球部を持つ大学の範囲

で 野球の強さを比べる」といった了解が前提としてあるとすれば、該当するのは上の 2 大学だけなので、「青山学院大学」を〈比較の基準〉とする上文 (13) は自然な文となる。

(12)(13) の考察から見てとれるように、「A は B より……」の文で B の〈比較の基準〉たりうるものには制約がある、ということになる。その B のところに入ることができる(＝〈比較の基準〉として妥当な)ものはどのようなものか、以下に例をあげてみよう。

「A は B より……」の B のところに入ることのできるものの例：

- [あ] 話し手、話し手の家族や、その持ち物 例「私は母より…」 「これは私のより…」
- [い] 相手(聞き手)、相手の家族や、その持ち物
- [う] 話し手や相手の近く(手元や見えるところ)の物・場所、近くにいる人
例「○○は これ/ここより……」
- [え] 「今日(昨日・明日)」 「今(先・来)週」 「今(先・来)月」 「今(去・来)年」 「今(前・次)回」 など
- [お] 直前に(または少し前に)話題にしていた人や物
- [か] 相手が比較の基準として想定している人や物
- [き] それまで話題にしていたわけではないが、〈比較の基準〉として使える人や物。
「基準になりやすい」「話題になりやすい」「関心の対象になりやすい」などの人や物。より具体的には、次のようなもの。
 - [き-1] 基準になりやすいもの 例「平均(標準/普通/いつも)より」「今日/今より」「以前(前に経験したもの/元カレ)より」「東京(または、話し手や相手の居住地・出身地)より」「富士山/スカイツリーより」
 - [き-2] 話題になりやすい、(ある範囲内でよいので) トップ・筆頭格の人や物
例「こんどの転校生は、田中(＝クラス一の俊足)より足が速いらしいよ」
 - [き-3] よく知られた人や物
例「彼はリトルリーグで大谷選手より野球がうまかったんだって」
 - [き-4] 関心の対象になりやすい人や物 例「フェアプレイはメダルより尊い」
 - [き-5] 極端なもの 例「苛政は 虎よりも猛なり」(孫子)
 - [き-6] 比較の対象の必然性を満たす場合(それに限られるなど)
例(渋谷の大学の野球部の強さを比べる場合)「国学院は青学より強い」

以上、できるだけ具体的に見てはみたが、要するに、B には〈比較の基準〉とするのにふさわしいものが入る必要がある、ということである。

5. 〈主題〉の満たすべきことと〈比較の基準〉の満たすべきことの微妙な違い

第 3 節では「A は……」の A のところに入ることのできるもの、第 4 節では「A は B より……」の B のところに入ることのできるものについて、見た。そもそもの問は〈「は」の比較文「A は B より……」の成立条件— どのような場合に使われるのか—〉であり、第 3 節と第 4 節の答を合わせたものがその答になるわけだが(より具体的には第 6 節で改めて考える)、A のみならず B にも制約があることが、この文型「A は B より……」の「奥の深さ」でもあり、教育上の扱いにくさ(第 2 節)をもたらしめている、といえようか。

また、ここで興味深いのが、それぞれの制約が一つまり、第3節で見た「Aに入るものが満たすべきこと」と、第4節で見た「Bに入るものが満たすべきこと」が一、かなり似ていること（例えば、前掲 [ア]ー[オ] と [あ]ー[お] とは一致する）とともに、また微妙に違いもあることである。これがまた「AはBより……」文のおもしろいところだと思われる。

以下少し、これについて考えてみよう。AもBも、簡単に言えば、そこに持ち出しておかしくないもの、ということだといえるが、〈主題〉として持ち出しておかしくないことと、〈比較の基準〉として持ち出しておかしくないことには、少し違いがあるということなのと思われる。

例えば、よく知られた人や物の場合でも、〈主題〉としては、やはり「それを持ち出してよい状況」がある程度整っていないと、「は」を付けてAのところに持ち出しにくい、ということに先程触れた。だが、よく知られた人や物は、〈比較の基準〉Bとしてなら、唐突にであっても、持ち出せるようである。上記 [き-3] の「彼はリトルリーグで大谷選手より野球がうまかったんだって。」がその例である。こうした点が、AとBの違いである。Bは〈比較の基準〉として持ち出すだけで、〈主題〉として持ち出すわけではないので、唐突な持ち出し方でもかまわないのだろう。

一方、〈主題〉として持ち出される分には聞き手として違和感がなくても、〈比較の基準〉として持ち出されると、なぜそれが〈比較の基準〉なのかという違和感が生じる場合もある。

(14) A：こんどできた餃子屋の餃子おいしいよ。山田君の作る餃子よりおいしい。

B：どうして急に山田君が出てくるの？

A：あれ、知らないの？ 山田君の餃子は、プロよりおいしいって言われてるんだよ。Aの補足説明がなければ、「山田君の作る餃子」が〈比較の基準〉になる理由がBにはわからなかった。その意味で、「山田君の作る餃子」をいきなり〈比較の基準〉として持ち出したのは不適当だったことになる。先程見た

(5) 山田君はきょう来るかな？（再掲）

では、「山田君」は、話し手と相手の間で日常的に話題になっているなどして すぐ了解・特定できる人物であるとして設定し、このため、いきなり〈主題〉としての登場が可能だと説明したのだったが、(14)の「山田君」を(5)と同一人物であると設定しても、(14)では〈比較の基準〉としてのいきなりの登場はできない。これも〈主題〉か〈比較の基準〉かの違いである。

「AはBより……」のAのところに入ることのできるものと、Bのところに入ることのできるものとは、大筋は近いのだが、以上のように微妙に違う点があり、それは、〈主題〉に求められることと、〈比較の基準〉に求められることとの違いであると捉えられる。

6. 「AはBより……」が自然に使われる、実際の授業で使える例文・状況

さて、「は」の比較文「AはBより……」は、対応する疑問文も考えにくいし、また、比較する二者がわかっている場合には 普通「A（のほう）がBより……」と言うので、この文型がどのような場合/状況において使われるのかを考えるのが意外に難しい、だが、これを示さないと、学習者はこの文型を適切に使えるようにならないので、この点を考え、それを踏まえてこの文型の教え方を考えよう、というのが出発点であった。第3節と第4節で、それぞれAとBに入ることばが明らかになり、〈成立条件〉が見えたところで、ここでは、より具体的に、

「A は B より……」の文型が自然に使われる例文とその状況を ―実際の日本語学習の場（授業）で使えるものを― いくつか考えてみよう。

例 1 先にあげた次例も、以下のように扱えば、使える例文である。

(4) 北海道は九州より大きいです。（再掲）

教授者が地図を見せて、北海道を指して「北海道です。北海道は大きいです。」と言った後、九州を指して「これは九州です。」と述べ、両者を比較して「北海道は九州より大きいです。」というふうに運べば、「北海道」も「九州」も、どちらも目に見えているので、「A は B より……」の A, B として持ち出しておかしくない。文 (4) は、例えば『みんなの日本語 初級 I』（スリーエーネットワーク）12 課で比較を教えるときの初めの文として登場するが、このように地図を見ている状況でこそ自然に使える文である。

例 2 複数のもの（例えば、特定の目的地に行くときの乗り物）について、複数の項目（所要時間、費用、その他特記事項等）を記した表を示して、これを見ながら「地下鉄はバスより速いです。」などの文を、教授者が例を示した上で、学習者が追加する。これも、A, B どちらも表中に見えているので、「A は B より……」の A, B として持ち出しておかしくない。

例 3 遊園地で身長が 1m 以上ならジェットコースターに乗れるというルールがあり、身長をチェックのために 1m のポールがあるとする。「A ちゃん」という子どもがジェットコースターに乗りたいとして、その身長をチェックする場面を想定し、

(15) A ちゃんはポールより背が高いです。

と言う。この場合、「ポール」はまさに〈比較の基準〉である。

例 4 特定の人（例えば自分の恋人）について、誰かと比較しての描写をする。「誰か」には、有名人や、その描写の意味づけにふさわしい人物を持ってきて、例えば次のような文を作る。

(16) 私の彼はイケメンです。私の彼は、〇〇よりイケメンです。

（〇〇には、イケメンとされる有名俳優の名を入れる）

(17) 私の彼は、野球が上手です。私の彼は、大谷選手より野球が上手です。

(18) 私の彼は、サッカーが上手です。私の彼は、三笥選手⁹⁾よりサッカーが上手です。

(19) 私の彼は、頭がいいです。私の彼は、〇〇より頭がいいです。

（〇〇には、例えばノーベル賞を受賞した「時の学者」がいれば入れるのにふさわしい）

このように非現実的な内容でもかまわないので、「恋人自慢」を学習者たちにしてもらおう。

「A は B より……」の A は、話題として持ち出してよい自分の恋人、B は〈比較の基準〉として持ち出すのにふさわしい有名人で、非現実的ながらこの文型になじむ内容である。

以上、「A は B より……」文が自然に使われる、学習者に伝えるのにふさわしい状況や例文を考えてみた¹⁰⁾

7. 「もっと」

7-1 「AはBよりもっと……」

ところで、日本語学習者は、しばしば次のような文を作る。

(20) 北海道は九州よりもっと大きいです。

この文は、母語話者は違和感をもつ傾向があるのだが⁽¹¹⁾、学習者はなぜこう言いがちなのだろうか。それはおそらく、学習者が「もっと＝more」と思っていて、かつ、英語(など)の比較構文では more または -er (に相当するもの) が必須だから、ということによるのだと思われる。その意味では、(20) のような「もっと＋形容詞です。」は無理もない産出なのだが、それはそれとして、では、この文に対してなぜ違和感をもつのかを以下考えてみよう。

「もっと」は more と違って、比較のときにいつでも使えるわけではなく、「もっと」がなじむのはある条件に適った場合である、そうでない場合に使うと違和感がある、というのが概略的な答であると思われる。以下にこれをより詳しく見ていくが、まず、(20) も、いつも違和感があるわけではなく、ある場合には自然に使えることを見よう。(20) が使えるとしたらどのような場合だろうか。例えば次のような場合が考えられる。

[a] 「九州は大きい」ということが直前の話に出ていたり、了解されていたりする場合

(21) 九州も大きいけど、北海道は九州よりもっと大きい。

(21) はおかしくない。このことからまず、「A は B よりもっと○○。」と言うには、B もある程度○○であることが必要なのではないかと考えられる。 次も類例である。

(22) A : Q 子ってかわいいね。

B : うん、でも P 子は Q 子よりもっとかわいいよ。

これらから、「A は B よりもっと○○。」が使われるのは(その1つの場合は)、「B もある程度○○だが、A が○○である程度は、その B の程度をさらに超えて引き離している」という場合だと考えられる。

[b] 相手が九州の大きさを北海道と同程度か、少し大きい程度だと思っている場合

(23) A : 北海道って、大きさはどのくらい？ 九州ぐらい？

B : いやいや、北海道は九州よりもっと大きいよ。

次も類例で、いい加減な地図で北海道が九州と同程度の大きさに書かれているのを見ての異議である。地図は、相手を書いたものでも、他の人が書いたものでもよい。

(24) この地図おかしいよ。北海道は九州よりもっと大きいよ。

これらは、「A が○○である程度は、相手が/誰かが A について想定している○○の程度(「B と同じぐらいに○○だろう」と想定している、その程度)をさらに超えて引き離している」という主張をこめて、「A は B よりもっと○○。」と述べているわけである。

[a][b] の「A は B よりもっと○○。」には通うところがある。すなわち、どちらも、「A は B より……。」のように単に A と B を比較して述べている文ではなく、「A が○○である程度」を、[a] では「ある程度○○である B が○○である程度」と比較して、[b] では「相手が/誰かが A について『B と同じぐらいに○○だろう』と軽めに想定している、その程度」と比較して、「A はそれをさらに超えて引き離している！」という主張を「もっと」で述べているわけである。

「A は B よりもっと○○。」(例 (20)) が使われる場合として、もう1つ、[c] を見ておこう。

[c] 「北海道」「九州」の他にもう1つ、第三のものを含めて次のように比較する場合⁽¹²⁾

[c-1] (25) 九州は四国より大きい。北海道は(その)九州よりもっと大きい。

[c-2] (26) 東北は九州より大きい。北海道は九州よりもっと大きい。

[c-3] (27) 北海道は東北より大きい。北海道は九州よりもっと大きい。

[c-1] では、当該の文(第二文)は北海道・九州の二者の比較だが、その前に述べられた「九州>四国」を意識した上での「北海道>九州」なので、「もっと」が出やすくなる。つまり、前文に「四国」があらわれたために「九州」が「ある程度大きい」ものであることが確保され、上記[a]と同じようにして(25)が成立しやすくなるのだと思われる。

[c-2] の第二文は、北海道と九州の大きさの比較を単純に行つての「もっと」ではない。北海道と九州の差を、東北と九州の差と比べ、「(より)大きい」の程度が「もっと」である—largeの程度が「もっと」なのではなく、largerの程度が「もっと」である—、というケースである。いわばmore largerという意味を述べるために「もっと」が使われているのだと見られる。(26)の「もっと」は、この内容を述べる場合には削除できないものである((25)の「もっと」はなくてもよい)。

[c-3] の第二文も、北海道と九州の大きさの比較を単純に行っているわけではない。こちらは、北海道と九州の差を、北海道と東北の差と比べ、「(より)大きい」の程度が「もっと」であるというケースである。第一文は[c-2]と違うが、largeの程度ではなくlargerの程度が「もっと」であつて「もっと」を削除できない点は、[c-2]と同様である。

以上、[c-1][c-2][c-3]とも、当該の第二文自体には「北海道」と「九州」しかあらわれないが、もう1つのもの([c-1]なら「四国」、[c-2][c-3]なら「東北」)が意識されているケースで、それが「もっと」を出現させている。その意味で[c-1][c-2][c-3]を括って述べたが、細かく見ると、いま見たように、[c-1]と[c-2][c-3]とではかなり事情が異なるともいえる。

以上のように、「AはBよりもっと〇〇。」は、「AはBより〇〇。」のように単にAとBを比較して述べているわけではなく、いわば‘有標(marked)’な文だと見られる。上記[a]の場合は「Bもある程度〇〇である」ということを受けて、また[b]の場合は「相手または誰かがAの程度をBと同程度だろうと想定している」ことを受けて、「AはBの程度をさらに超えて〇〇である」という主張を「もっと」がしている、と捉えられる文であり、「もっと」という形がこうした意味(前提および主張)を表わしている、その意味で‘有標’の形式だといえよう。[c]の場合も、当該の文は二者比較の形をとっているが三者比較が意識されているという‘有標’性を—また、特に[c-2][c-3]の場合は、前出の語例でいえばlargeではなくlargerの程度を問題にしているのだという‘有標’性を—「もっと」が示しているといえるだろう。

「AはBよりもっと〇〇。」の「もっと」は、以上のいずれかの条件(他にもあるかもしれないが)に適った場合になじむのだと見られる。このような条件に適っていない場合の「AはBよりもっと〇〇。」に—特別な文脈なく提示された(20)に—違和感があるのは、このためだと考えられる。

7-2 「Bより」を伴わない場合の「もっと」

以上、「AはBよりもっと〇〇。」という文が使われる場合には条件があることを見て

きたが、もし「B より」を伴わなければ、「もっと」は使いやすくなる。

- (28) 本が増えてきたので、もっと広い部屋に住みたい。(今より)
- (29) そこだと写真に写らないので、もっと左に寄ってください。(今のあなたの位置より)
- (30) 暑いなあ……。図書館に行こうよ。もっと涼しいよ。(ここより)
- (31) 「これ買おうか。」「きのう西武で見たほうがもっとよかったよ。」(今見ているこれより)
- (32) 私は今までクラス一俊足だった。でも今度、もっと速い子が転校してきた。(私より)
- (33) そんなに怠けてると、もっと勉強してる子にどんどん負けていくよ。(あなたより)
- (34) 次の試験のときはもっと勉強しよう。(もう終わった今回より)
- (35) 彼女ならもっとうまくやっただろうに。(終わった今回の結果より)
- (36) 軽井沢はもっと静かなところだと思っていました。(実際に経験した軽井沢より)

これらの文では〈比較の基準〉は明示しなくても了解できる。() に示したように「今/ここ/これ/話し手/相手/直近の経験」などである(他にもありうる)。この意味では〈比較の基準〉を述べる必要はないのだが、それを述べないと、比較して述べていることがはっきり伝わらないことがありうるので、比較して述べていることをはっきり示すために一つまり、例えば (28) なら、もし単に「広い部屋に住みたい。」といえど「とても広い部屋?」「どのぐらい広い部屋?」ということになるが、「今より広ければいい」という希望であることを「今より」を言わずに示したいために―「もっと」を使っていると見られるケースである。このように、「B より」を明示しない場合には「もっと」が出やすくなり、この場合は、7-1 で見た‘有標’な(多少とも複雑な)「もっと」の使い方ではない。

7-付 「ずっと」

「もっと」のついでに、「ずっと」にも触れよう(「朝からずっと勉強している。」のような「ずっと」には、ここでは触れない)。両語の違いについてよく学習者から質問を受けるのだが、「ずっと」は、実は「もっと」とではなく、「ちょっと」や「少し」と比べるべき語である。

- (37) a A は B より大きい。

と述べるだけでは、A と B の大きさの差がどのぐらいかはわからない。それを示そうとして、その差が小さければ (38) b, 差が大きければ (38) c のように述べるわけである。

- (38) b A は B よりちょっと(少し)大きい。

c A は B よりずっと大きい。

「ちょっと」「少し」は普通の程度副詞で、比較の文脈でなくても「この問題、ちょっと(少し)難しいよ。」などとも使えるのに対し、「ずっと」は程度副詞の一種ではあるが、2つのものを比較してその差の程度を問題にするという、特色のある程度副詞であり、その差が大きい場合に使う⁽¹³⁾。「もっと」のほうは、

- (38) d A は B よりもっと大きい。

の意味自体は (38) a と基本的には同じで(その意味を、(38) d は、7-1 で見た条件に適った場合に上述のような主張をこめて述べる点だけが (38) a との違い)、(38) d では、A と B の差は(大差でもよいが)必ずしも大差でなくてもよい。この点、(38) c の「ずっと」との違いである。次の「もっと」の文はありうるが、「ずっと」の文はおかしい。

- (38) d' A は B よりもっと大きいですよ。「もっと」といっても僅かですが。

c' × A は B よりずっと大きいですよ。「ずっと」といっても僅かですが。

8. 「Vたほうがいい」

「Vたほうがいい」も、学習者が思いのほか適切に使えない。元々比較の表現なので、触れておく。

(39) A (日本人) : そのうち中国を旅行したいと思っています。

B (中国人) : 万里の長城に行ったほうがいいですよ。

例えばこのような使い方をする学習者がいるが、この「Vたほうがいい」には、日本語として違和感がないだろうか⁽¹⁴⁾。「Vたほうがいい」はしばしば〈助言〉の表現として教えられるが、〈助言〉ならいつでも「Vたほうがいい」が使えるわけではない。「Vたほうがいい」はどのような場合に使うのがふさわしいかを明らかにし、学習者に伝える必要がある。

(39') A : こんど北京に行くことになりました。

B : そうですか。観光のご予定も決まりましたか。

A : ええ、有名なところをいくつか。ただ、万里の長城は、外してもいいかなと。

B : え？ そうですか。いやあ、万里の長城は、皆さん「行ってよかった」って言いますよ。行ったほうがいいんじゃないかなあ。

(39') の「Vたほうがいい」には(こうした助言が差し出がましいと感じる人は一部いようが、その点を別にすれば、日本語自体には)違和感はないだろう。(39) と (39') の違いは何か。

(39') では、相手が「万里の長城には行かないつもりだ」と述べたのに対して「行ったほうがいい」と助言している。一方、(39) では、「万里の長城」の話が出ていない—相手が「万里の長城」に行くそぶりも、行かないそぶりも、まだ見せていない—段階で、「行ったほうがいい」と助言している。(39) と (39') の「Vたほうがいい」の違和感の有無の違いは、この点に求められると思われる。

「Vたほうがいい」がふさわしい〈助言〉とは、

- 1) そのままだと (=その助言をしないと) , 相手がその行動 (V) をとらない (場合によっては、それと反対の行動をとってしまう) ことが予想され、
- 2) それが相手にとって不利益をもたらすので、
- 3) その不利益が生じないように助言する

という性質の〈助言〉だと捉えられる⁽¹⁵⁾。(39') では、この助言をしないと、相手は「万里の長城に行かない選択」をしてしまうので、それは損ですよという気持ちからの「Vたほうがいい」がなじむケースだが、(39) では、相手が「万里の長城に行かない」という姿勢を見せているわけでもなく、放っておいても (この助言をしなくても) 「万里の長城」に行くかもしれないのに、「Vたほうがいい」と述べるのが違和感をもたらすのだと思われる。他の例をあげると、

(40) (体調が悪そうなのに仕事をしている人に) 無理しないですぐ医者に行ったほうがいいよ。

(41) (同じ行先に向かうが左右に分かれている道があり、その一方 (左) を行こうとしている不案内な人に) その道は危ないところが多いので、右の道を行ったほうがいいですよ。

などは、「放っておくと医者に行かずに、体を悪くしてしまう」「放っておくと反対の行動をとって、危険な目に遭う」ケースで、「Vたほうがいい」がなじむ例である (特に (41) は、危険を避けさせたいケースなので「Vたらどうですか」はなじまない)。

「ほう」は、もともと「AのほうがBより……」(前掲 (3)(3')) のように二者比較で使う表現なので、「Vたほうがいい」も、その「その行動をとる」vs.「そのままその行動をとらずにいる (あるいは、反対の行動をとる)」という2つの選択肢の優劣を比べる二者比較の発想をと

どめていると見られ⁽¹⁶⁾、この点も、学習者に伝えると、適切な使用につながる。

「V たほうがいい」の指導では、以上を踏まえて、上記 1) 2) 3) を満たすふさわしい使用場面を具体的に提示したい。一例として、身なりに構わず（髪はぼさぼさ、髭も剃らず、服はボタンがとれてる）、部屋も乱雑な若者の絵を示し、〈この若者の「彼女」が今日彼を訪れる〉という設定で、学習者（この若者の友人として設定）に、この若者に対して「彼女が来る前にしたほうがいいこと」を助言するようにという指示を与え、「髪をきれいにしたほうがいいですよ」「服を変えたほうがいいですよ」「花を飾ったほうがいいですよ」などの文を産出させる、といったものが考えられる⁽¹⁷⁾。

以上、「A は B より……」文をはじめ、比較に関係する学習事項について、深く追うと興味深い点や、現状の問題点をあげ、授業をよりよく行うためのいくつかの提案も行ってみた。

注

- (1) 本稿は、第 35 回国学院大学日本語教育研究会（2023 年 12 月 16 日）での講演「「X は Y より……」文の奥深さ ― 〈どんな場合に使うか〉を考える/教えることの重要性 ― 」をもとに、論文として書き改めたものである。
- (2) より正確には、疑問文が発せられていなくても、こうした疑問文が潜在するような状況でも使われる。なお、「N がある」の文は、実は「何がありますか」という疑問文に対して使う以外の使い方もある。例えば、予期せぬ物を発見して「あ、ATM がある！」と言うとか、有無の質問を受けたのではない場面で、相手に（例えば空腹の相手に）「サンドイッチがあるよ」と言って差し出すとか、という場合である。こうした用法（の一部）についての指導も加えるほうが望ましいが、とりあえずは (1) (2) のような〈対応する疑問文の違い〉としての指導が一般的である。
- (3) 日本語教育における存在文 vs. 所在文については、菊地（2021：3-4）で今少し詳しく触れた。
- (4) (3) と (3') の「のほう」はあったほうが自然で、多くの教科書が「のほう」を付しているが、不可欠とまではいえず、基本的には「が」vs. 「は」の問題ともいえるので、ここでは「のほう」を（ ）に入れた。
- (5) 比較の基準となりうる候補が複数あり、そのどれと比べた場合にそういえるのかを問題にする場合には、比較の基準を疑問詞にした質問もありうるが、かなり特殊な場合であり、日本語を教える教室で、そうした手の込んだ不自然な状況設定をするのはなじまない。なおまた、「北海道は九州よりどうですか。」という疑問文も不自然である（「九州に比べて」ならありうるにせよ）。
- (6) （後日の読者のための注）「新型コロナウイルス感染症」のこと。2020 年から多数の感染者（一部は死亡）が発生し、患者の増減を繰り返しながら、本誌刊行時（2024 年 3 月）に至っている。
- (7) （後日の読者のための注）野球の大谷翔平選手。米大リーグで投手・打者の両方で活躍し、本誌刊行時現在、最も話題となる野球選手である。
- (8) 以上と同趣旨のことは、菊地（2002）でも述べた。なお、「は」が付くものについて、「既知のもの」とか「旧情報」だとする説明が行われることがあるが、上の (8) が日常会話の冒頭で唐突に使うには無理があるがニュースの冒頭でなら使えるということからも、「既知」や「旧情報」で説明できる話ではない（また、そもそも「既知」や「旧情報」の定義も曖昧である）。
- (9) （後日の読者のための注）三笥薫選手。本誌刊行時現在、日本で最も話題となるサッカー選手の一人。
- (10) 以上のうち例 3 と例 4 は、筆者の以前の勤務先である東京大学日本語教育センター（の前身組織）のティーチングスタッフであった藤城浩子氏から得たアイディアである。

- (11) (20) について違和感の有無を尋ねるアンケートを、筆者の授業を受けた国学院大学の 2021-23 年度の学部学生を対象に行ったところ（日本語を母語とする学生の回答数 53）、「違和感あり」またはこれと同趣旨の回答 27、「少し違和感あり」またはこれと同趣旨 15、「違和感なし」（「あまりない」を含む）10、その他 1 であり、「少し」も含めると約 8 割が違和感を感じていた。
- (12) 筆者は 2021-23 年度の国学院大学の授業で、「A は B よりもっと〇〇。」（具体的には (20) の「北海道は九州よりもっと大きいです。」）が違和感なく使える場合を考えてみようという課題を課し、学生諸君とともに考える機会をもった。[a][b][c] は、これについての学生諸君の答を踏まえた整理である。特におもしろい例と思われる [c-2] は、2023 年度受講学生の佐藤千雪氏と染谷尚幸氏の指摘に負う。[c-3] は 2022 年度の土屋裕氏の例文に変更を加えたものである。
- (13) 具体的な指導法としては、大きさの違う 2 つの円 A, B を描き、その際、大きさの差が僅かな場合と、大きさに大差がある場合の両方を描いて、それぞれが (38) b, c だと教えればよい。
- (14) (39) の B の文について違和感の有無を尋ねるアンケートを、筆者の授業を受けた国学院大学の 2020-23 年度の学部学生を対象に行ったところ（日本語を母語とする学生の回答数 85）、「違和感あり」は 3 にとどまったが「少し違和感あり」またはこれと同趣旨の回答が 33、「違和感なし」（「あまりない」を含む）46、その他 3 であり、「少し」も含めると 4 割強が違和感があるとした。
- (15) 1) については石橋（2003：11, 20-21）に、2) 3) については「実現しないと悪い結果になる」（高梨 1999：左 61。石橋 2003：20 も同趣旨）、「選択しなければ生じる不利益への注目」（増田 2005：291）として、すでに指摘がある。「V たほうがいい」のポイントはこうした点にあり、2) 3) を満たせば〈助言〉に限らず自身の行動にも「来週ゼミの発表があるので、今日のパーティーは行かないで、発表の準備をしたほうがいい。」などと使える。〈助言〉だけを前面に出して教えると学習者がこうした文を産出しにくいという趣旨の注意喚起が増田にある。
- (16) この点、高梨（1999：左 59）、石橋（2003：4, 10）、高橋（2003：75）、増田（2005：291）に指摘がある。なお、「V たほうがいい」と「[V 辞書形] ほうがいい」では、後者のほうが二者比較性が強く、「V たほうがいい」は二者比較性をとどめつつも、いわば文法化の程度を強めているといえるかと思う。
- (17) こうした若者の絵は『続・クラス活動集 131 —『新日本語の基礎Ⅱ』準拠—』（高橋美和子・平井悦子・三輪さち子、スリーエーネットワーク）p.66 の絵が利用できる。この絵は同書では「まだ V ていません」の教材として提案されているが、これを「V たほうがいい」の教材に利用するのは太田陽子氏のアイディアである。

参考文献

- 石橋容子（2003）「「したほうがいい」の文のもつ意味」『琉球アジア社会文化研究』6、琉球アジア社会文化研究会、pp.1-36.
- 菊地康人（2002）「ハとガの話」『UP』31 巻 12 号（12 月号）、東京大学出版会、pp.25-29.
- 菊地康人（2021）「日本語教育における「は」と「が」」『国学院雑誌』122 巻 10 号（10 月号）、pp.左 1-20.
- 高梨信乃（1999）「評価的複合表現スルホウガイイについて」『神戸商船大学紀要 第一類 文科論集』48、pp.左 55-65.
- 高橋純子（2003）「「病院へ行ったほうがいいですよ」のコミュニケーション（連載：初級文法で磨く会話のテクニック 10）」『月刊日本語』16 巻 1 号（1 月号）、pp.72-75.
- 増田真理子（2005）「教室の文型学習と運用力をつなぐもの —「機能ラベル」と「固定イメージ」に縛られない学習：「～たほうがいい」「～てみる」を例に—」『日本語教育学会 2005 年度春季大会予稿集』pp.290-291.